

角田光代『紙の月』を読む

—まやかしの〈愛〉とまやかしの〈わたし〉—

北出 真紀恵

一 〈わたし〉を探し求めて

アイデンティティという概念は、エリック・エリクソン（一九五九）によって提出された。上野千鶴子（二〇〇五）の整理によれば、六十年代のはじめに心理学者によって日本に紹介されたエリクソンのアイデンティティという概念は、江藤淳が『成熟と喪失』（一九六七）で紹介したことを通じて、日本社会に浸透し、定着した。

私たちはもはや、アイデンティティなしでは生きられない。それは、この概念が「同一性」あるいは「存在証明」（石川准、一九九二）と訳されることが物語っている。

〈わたし〉とは誰か。ほんとうの〈わたし〉はどこにいるのか。〈わたし〉は誰を愛し、誰から愛されているのか。そして〈わたし〉とは何者か。これらの問いは、近代社会特有のものである。上野（二〇〇五）は、内面を持った近代的「主体」つまり「個人」が成立した近代社会とは、〈わたし〉とは何者であるかを強迫的に問われるようになった時代「アイデンティティの時代」であったと述べている（上野、二〇〇五：一三三）。

社会学的自己論は「アイデンティティとは何か」を問い、「アイデンティティとは何であると考えられてきたか」を問い続けてきた。な

角田光代『紙の月』を読む

ぜなら、アイデンティティは自己と社会を架橋するインタラクティブな場に立ち現れるからである。

角田光代作『紙の月』は、〈わたし〉をめぐる傷つき、〈わたし〉を探し求めて逃走する女性の物語である。

主人公の梨花（四十一歳）はパートとして勤め始めた銀行で顧客の一億円を横領する。梨花が逃亡先のタイでひとりたらずむ場面から始まるこの物語は、彼女の逃亡劇を描くのではなく、梨花の過去へとさかのぼってゆく。なぜ、梨花は一億円を横領することに至ったのか、一億円は何に使ったのか。作者の視点は梨花の過去へと展開し、繊細にその日常にわけ入り、淡々と深層に迫ってゆくこととする。

同書は、平凡な結婚生活における違和感の積み重なりが描写され、多くの女性たちの、特に四十代や五十代の女性たちの共感と呼んだ。

小稿では、主人公の孤独と空虚感が何に由来するものなのか、梨花が欲望したものは何であったのか、また、現代を生きる私たちが彼女の何に共感したのかを探ってみよう。

以下、『紙の月』に描かれる主人公の〈わたし〉をめぐる旅についてたどってゆく。次節では、現代家族（夫婦）のなかの空虚感について述べ（二節）、次に〈わたし〉の「欲望」の対象について論じる（第三・四節）。最後に、〈わたし〉が「自由」になることの意味を考えてみたい（第五節）。

二 結婚（制度）の中の孤独

さっそく、物語における梨花の結婚生活をみてゆくことにしよう。

垣本梨花は一九八六年、二十五歳のときに二歳年上の梅澤正文と結婚した。短大時代の友人の紹介で知り合い、一年弱の交際を経て、それまで勤めていたカード会社を辞め、専業主婦となった。正文は食品メーカーのサラリーマンである。梨花は、比較的裕福な家庭に育ち、金銭的苦勞をしたことがなく、まじめで「おろしたての石鹸のような美しさ」を持つ女性として描かれる。ちなみに、一九八六年は男女雇用機会均等法が施行された「女性の時代」の幕開けとして象徴的な年である。「女性の時代」とうたわれた八十年代は女性の社会進出が進んだとされる一方で、税制、年金、社会保険制度等で専業主婦が優遇される制度の多くが始まった時代でもあった。山田昌弘（二〇〇五）によれば、女性の仕事をめぐり八十年代後半には若い女性の仕事志向が強まったように見えたが、実態としてはニュー・エコノミーの浸透で男性の雇用が不安定化する九十五年頃までは多くの未婚女性は専業主婦志向であったと分析している。それも「好きな仕事には就けそうもない」という消極的専業主婦志向と呼ぶことができるのであって、男性の収入が十分で、中流の生活が維持できる限りにおいては、性別役割分業に満足している男女が多かったのだという（山田、二〇〇五・一六八―一七九）。梨花の設定には「一九八六年」「短大」「二十五歳」「寿退社」など、女性にとって両義的であった八十年代のキーワードがちりばめられている。結婚することによって「垣本」から夫の姓の「梅澤」になることも示唆的である。それが「普通のこと」とされていたのであり、「当然のこと」として受け止められていたのだ。

梨花は、正文に「彩りゆたかな弁当を作り、朝食を作り、正文が会社についてからは部屋じゅうを掃除し、夕方には買いものについて、

豪華ではないが品数の多い夕食を用意して夫の帰りを待った。」多くの女たちにとって、そうすることが幸せな結婚生活であると考えられていた。

結婚三年目の一九八九年、正文は東京の郊外・横浜市緑区の長津田に建て売り住宅を購入する。梨花は実家よりもずっと狭いけれど、真新しくかわいらしいその家が好きで、家の中を精一杯飾り、小さな庭を整えた。

子どもができず、時間を持って余した梨花は料理教室に通い始める。そこで友人もでき、「社会にもかかわっておらず子育てもしていないとしても、それでも充実した日々は送れる」と自らに言い聞かせるようになった。

しかし、そんな気分は長くは続かない。きっかけは正文のひとつであった。軽井沢の別荘でのバーベキューパーティに誘われた梨花に正文はいう。「おやつは五百円まで？」

梨花は笑うことができない。梨花と正文の関係とは、個人と個人との対等なつながりではなかったか。梨花は正文にとって「子ども」のような存在なのか。正文にとってはほんの冗談のつもりで、梨花は「夫に許可を得てそれらのことをしている」という感覚がついてまわるようになる。

料理教室で知り合った友人・亜紀にすすめられ、「仕事でもはじめてみよう」と梨花は思う。夫・正文は反対することもなく「それはすごくいいとおもう」と笑顔でいうのだが、それだけで、どんな仕事をするのかは訊かなかった。正文は妻が仕事をするといいっても反対せず、食卓に出来合いの総菜がならんだとしても文句を言ったりしない。正文の愛情表現は、妻のために働くことである。正文が稼いでこなければ、梨花は生きていくことができない。正文には梨花を扶養してゆく責任がある。それを支えに自分を支え、愛する妻のために「よい生活」を提供すること、それこそが正文にとっては〈愛〉の表現である。梨

花が「働きたい」といえば、好きなようにさせてやりたい、とも思う。そもそも梨花が働いているのは家計のためではなく、ちょっとした気分転換なのであり、夫婦間の性別役割分業を侵害もしなければ、正文の「男」としての尊厳を侵すこともない。

しかし、正文は自分が稼いでやっているのだということを繰り返して確認するようになる。

その「釈然としない」気分は今も続いている。続いているというよりも、梨花の内側でどんどん大きくなっている。「ごちそうさま」の一件だけではなかった。折に触れ、正文は梨花の一ヶ月に稼ぐ額がいくかに少ないか、さりげなく言及する。海外旅行はもちろん、家計の足しにもローン返済の足しにもならないと、はっきりではなく遠まわしにいうのである。その真意が梨花には未だにわからない。だから言葉に置き換えることができず、釈然としない気分は釈然としないまま、軽い不快感となって梨花の内にとびりついている。

「馬鹿ね、自分があなたを養っててことをしらしめたいんじゃないの」と友人の亜紀は梨花に笑いながら言う。亜紀の友人には「外で働くことを許してもらえない」女もいるという。そのような夫に比べれば、正文は優しく寛容な良い夫である。しかし、亜紀のそうした説明も梨花にはよくわからない。

ある日、正文は人事異動があること、だから忙しくなるかもしれないと告げ、それでもいいよという梨花に「許可なんて求めてないよ」とさらりと言う。

なんか違う、という気分と、正文の言っていることは正しい、という気分が、両方わきあがる。少し考え、梨花は後者を採用す

角田光代『紙の月』を読む

る。たしかに、私が許可するようなことではない。異動してかまわないなどと言える立場ではない。だからあとであやまらなければ。えらそうないかたに聞こえたらごめんさいと、あやまらなければ。ソファテーブルに放置された腕時計を見て梨花は考える。げっぷをのみこんだような軽い気持ちの悪さが喉のあたりに残っている。

こうした梨花の違和感、気持ち悪さは何であろうか。

恋愛の延長線上にあるはずの結婚という制度そのものが女たちにとって抑圧をはらむものであったことはすでに明らかである。かつて駒尺喜美（一九七八）は「男は女を扶養することにより、主人の位置につき、女を従者として従わせる、というのが結婚の原理的な構造である」と述べた。そして「この原理によって社会のあらゆるしくみが成り立っている」のであり、「男は経済力・社会的支配力を独占することによって、女を組み敷いている。女は男の経済力に依存して、生きるように仕向けられている。その関係構造の中で、男と女のセットが成立するのであるから、この関係は、初めから自由な独立人、自立できる人間同士のセットではない」と看破したうえで、こうした関係構造の中にあっては、男が女を、自分の意のままに従う存在物とみるのは当然であるとした。思えば、対等な個人と個人の「関係性」の希求をめざした「恋愛」と、近代社会において性別役割分業を基盤とした「結婚」という制度は、その成立から矛盾を内包するものであった。結婚制度の中では家族のために外で働き、「よい生活」を提供することが夫の愛情表現となり、「愛情弁当」や「手入れの行き届いた庭」や「整頓された部屋」といったものが妻の愛情表現とされた。経済的な成長は収入の増加をもたらし、夫にとってその愛情の増加を示すものである。たとえ、彼らが仕事第一で家庭をかえりみることがせず、妻の内面にまったく興味を示さなかったとしても、経済的な成長はその矛盾を隠

蔽してきたといつてよい。だが、女たちにとって結婚生活は結婚前の交際と地続きのようにみえて、大きな断絶があった。夫の経済力に依存していく生活の中で夫との関係は次第に変質をもたらしてゆく。扶養される側の「寂然としない」「軽い不快感」や「なんか違う」という気分をのみこんだまま、女たちは次第に孤独を深めてゆく。

斎藤環(二〇〇九)は、男女の欲望の違いを「所有の原理」と「関係の原理」であると説明した。斎藤(二〇〇九)によれば、性別役割分業という夫婦関係に契約という「所有の原理」をもちこむ男性に対して、女性には結婚を新しい「関係性」の始まりとみなしてそこに「関係性」の質的な深さを希求する。「関係」は形式として、不断に濃密な感情の器であり続ける必要があるのだ。したがって「関係の原理」を生きたる女性にとって、「所有の原理」である「契約」の夫婦関係には本質的な違和感が最後まで残るのだという(斎藤二〇〇九:八一—一〇四)。「所有」したい男と「関係」したい女はどこまでいってもずれ違ってしまうのであり、経済性を男性に担わせる夫婦の関係においては、妻の空虚感が増していくことになる。

ベティ・フリーダン(一九六二)がアメリカの郊外に住む中産階級の主婦の不幸について、〈わたし〉の内的崩壊を「名前のない不幸」として問題化したのは六十年代の初めであった。働く必要のない専業主婦たちが抑うつ状態に陥る現象はアメリカだけではなく日本を含む先進諸国において群発的にみられた。半世紀前に書かれた「女らしさの神話」からの解放をうたった『新しい女性の創造』は、現在もフェミニズムの古典として読み継がれている。

作者は梨花の結婚を一九八六年とした。「女性の時代」とうたわれた八十年代とは、女たちを分断し、女たちの内面をひきさいてゆく、女性にとってまさに両義的な時代であったことを忘れてはならない。

現代においても、「関係の原理」よりも「所有の原理」(契約、あるいは性別役割分業)を優先させてきた男女の間には、澁のように積もっ

てしまったすれ違いが顕在化しつつある。

幸せなはずの結婚という制度の中で女の孤独は埋め込まれ、梨花の「関係性」への欲望は引き裂かれたまま、空虚感が増殖してゆく。

三 欲望への欲望

本節では、〈わたし〉らしさを追求した先の、〈わたし〉探しの時代の消費行動に焦点をあててみたい。関係性の欠如感をかかえた梨花の欲望は、どこへ向かったのだろうか。

パート社員として銀行で働き始めた梨花は、顧客の孫である光太と出会う。光太は大学生ですでに留年が決まっているのだが、いつか映画をつくりたいという夢を持っている。

どうやら自分よりひとまわりも年下のこの男の子は、からかいたいわけでもなく、お世辞を言っているのでもなく、自分に対して何か魅力を感じているらしいと梨花はようやく思い至った。なぜよりよってとか、退屈な話しかできないのとか、共有するものなんて何もないのとか、年齢が違いすぎるのとか、数多の疑問を今だけは意識的にわきへよけることにした。うれしかった。三だつた成績が四にあがったような、選抜チームに選ばれたような、誰かに認められたようなうれしさだつた。

いいなと思ったから、そういった光太の言葉が梨花の心を動かしてゆく。「三だつた成績が四にあがったような」誰かに認められる、誰かにいいなと思われる、そんな単純なうれしさが梨花を変えていく。パートタイマーからフルタイマーになった梨花の給料は倍になり、梨花はうれしくなる。自分への(労働力商品としての)評価があるというのを梨花は初めて体験したのだ。だが、梨花の買い物は「必要

驚かせるために、光太との時間をすごすために、光太と現実離れた「夢」のような世界に安住するために。それらは、赤坂のホテルのスイートルームで過ごす休日であり、二子玉川の家賃二十八万円のマンションであり、ジル・サンダーの服であり、フェンディの靴であり、光太に買ってやるパテック・フィリップの時計であつたりする。梨花はぼんやりとそれらをただ眺める。

二子玉川のカフェで、バラソルの位置を変えさせる光太の姿に、梨花は「何か腑に落ちない」ものを感じながら、光太が大学を辞めたことを知る。「そういえば、大学ってどうしたの」

梨花は時間の感覚がまるでないことに気づく。「いつからかある部分で時間は止まっている。長津田の家に時間は流れていないし、光太のマンションにも、光太と泊まったホテルにも食事をしたレストランにも時間は流れていない」のだ。梨花にとって光太との時間は「乖離」^①としても描かれている。梨花の精神を乖離へと追いやるのは、すでに自動運転はじめ、止めることもできず、肥大化し続けてゆく欲望への欲望であつた。

四 まやかしの〈お金〉 まやかしの〈愛〉

梨花が欲望したものは、何だったのだろうか。

「いつの話？ 大学なんてとうにやめたよ。梨花さんってほんと、ぼくに興味がないんだな」

「家族のひとたちは元気なの」梨花は訊いた。訊いてから気づいた。本当に興味などないのだ。光太が学生か否か、彼の、リストラにあった父をはじめとする家族がいったいどうなったのか、そんなことを何ひとつ知りたと思わなかつた。

光太は黙っている。梨花が家族のことを知りたがっていないことを、彼はとうに知っているからだ。梨花は光太のために多くのお金を使うが、光太が何を考え、何に悩み、どのように生きていこうとしているのかといったことに興味などない。それは、かつての正文の、梨花が遊びに行くのはいいけれど、誰とどんな会話をし、何をどのように感じたのかに興味はなく、パートに出るのはよいが、それがどのような仕事で、日々の仕事で何をどのように感じたのかといったことに興味がないのと同じである。

「所有の原理」の夫に「関係の原理」を生きる梨花はあれほど傷つけてきたというのに、梨花は、光太に「関係性」など求めていないことに気づいてしまう。

「関係性」の欠如を埋めるために「買い物」という過程に耽溺し、「愛の対象」とつながってゆこうとする。だが、光太とのあいだに「関係性」が構築されることはなく、光太という「愛の対象」をつなげるための「買い物」という過程には終わりが無い。買って、買っても、いくら買い物しても満たされることはない。へわたしへわたしであるために、いくら買っても、いくら愛したとしても、へわたしへはみつからない。梨花にとって「買う」と「愛する」は同義であるが、愛しても、愛しても、獲得することはできず、へわたしへにたどりつくことはできない。

梨花が愛しているのは誰なのか、いったい何なのか、なぜ、愛の対象が光太だったのか、梨花にはわからない。なぜなら、梨花の欲望の対象は欲望だからだ。

光太に年若い恋人がいることを知っても、梨花は光太との関係が続けてゆく。そして、光太とその若い恋人との関係は、スイートルームや高級レストランとは無縁の健康的なものであることを、梨花は合計二百十五万円支払った興信所三社からの調査報告書で知る。

私はあなたに今までいくらつかった？貸したお金、ものを買ったお金、食べたお金、交通費、マンションの賃貸料、車の購入費、維持費、株の資金、それだけのお金をうけとっておいて、今日会いたいというたった一度の願いも却下するわけね。梨花ははじめに光太に怒りを覚える。怒りながらも笑いたくなる。実際、笑う。いくらつかったか、自分にもわからないのである。三千万か、それ以上か。それだけの金額でも、今日会う時間は買えなかったのか。子機をにぎりしめた手のひらが汗でじっとりとする。

会う約束をとりつけ、梨花は光太に借りてやっている二子玉川のマンションに向かう。光太には何も聞かず、梨花はとうとうとこれからの計画を語りだす。光太は確かに梨花が描くこれからの生活の一部であるが、そこに光太の思いは反映されない。正文との生活で梨花が存在していなかったように、梨花と光太との関係においては、光太が誰を思い、何を考えているかは問題にされず、光太は「存在していない」のも同然なのだ。

「梨花さん、ごめん、おれ、ここから出ていきたい」

「ここから出して」

「お願い」

「頼むから」

「こっぴどこ」。

梨花との関係における「関係性」の欠如は光太に抑圧をもたらし、そこからの逃走を余儀なくする。光太もまた「関係性」を必要としている。

角田光代『紙の月』を読む

梨花が愛したのは光太ではなく、梨花はただ、光太という「愛の対象」を必要としたのだ。それが不正な行為で得た〈お金〉だとしても経済のすべてを梨花が負担すれば二人の関係は権力関係である。梨花は光太を「関係の原理」で欲望することができなかった。光太という「愛の対象」を欲望することが、光太を「所有」することに転化してゆき、彼を抑圧していたことに気付かなかった。そのことに梨花は傷つく。梨花の空虚感、**「関係」**における分裂に由来しているのであり、「所有」で埋めることはできない。そして、どこまでいっても**「わたし」**は統合できない。

五 「わたし」からの自由

梨花は逃亡する。梨花はただ幸せになりたかっただけだ。誰かを愛し、誰かに必要とされる**「わたし」**でありたかっただけだ。**「わたし」**が**「わたし」**であるために、**「わたし」**が**「わたし」**になるために、愛したかっただけだ。そして、愛されたかっただけだ。だが、「愛の対象」を見つけても「関係性」を築くことができなかった。

「もしだれかが訪ねてきて、梅澤梨花を知っているかと訊いても、知らないといって。会ったこともないって言って。わかっただね」
梅澤梨花を知っているか。

本当にいつたいたいだれが梅澤梨花を知っているというのだろうか。私にだって自分がどんな人間なのか、ちっともわかりはしないというのに。

「**「わたし」**らしき」が求められ、現代が「**「わたし」**探しの時代」といわれて久しい。

「**「わたし」**とは何者であるかを強迫的に問われるようになった時

代」(上野、二〇〇五・三)にあって、私たちはどのように「へわたし」と向き合ってゆけばよいのだろうか。

上野(二〇〇五)は「アイデンティティ強迫」を超えてゆくために「脱アイデンティティ」という戦略を企てた。

「アイデンティティの時代」を経たあとの「脱アイデンティティの時代」において、アイデンティティの成立はたとえ次のように説明される。「ジュディス・バトラがアルチュセールに依拠して理論化したようにアイデンティティとは『そこのおまえ』にピンポイントされたときにアイデンティティは成立する。」(上野、二〇〇五・三〇)のだと。そして上野は「そのような『存在証明』をつねにそれを強迫的に必要とされるのは、支配権力の側ではなく、支配権力から少数者としてカテゴリー化される側である」(上野、二〇〇五・三〇)ことを強調する。なるほど社会的アイデンティティは社会的カテゴリーと結びついており、優位のカテゴリーに属するものは証明を迫られることはない。存在証明を迫られるのは劣位のカテゴリーに置かれるものであるということ、ポスト構造主義の理論は明らかにしたのである³⁾。

アイデンティティの危機は、その関係において劣位のカテゴリーに置かれるものに訪れがちである。

私たちが、『紙の月』の梨花に共感を覚えるのは、個人的な関係において劣位に置かれ、アイデンティティを必要とし、「存在証明」のために、恋愛(という「関係」)に依存してゆくひりひりとした孤独である。買い物という過程に依存してゆくばかりとあいた空虚感である。日常のなかのささいな一言に潜む権力関係に傷つけられ、あきらめ、「へわたし」が「へわたし」であるために、「へわたし」が「へわたし」になるために、「愛の対象」を必要とする女たちのいかに多いことであろう。そして、愛しすぎる女たちのいかに多いことであろうか。私たちの孤独と梨花の孤独は隣り合わせにあり、私たちの空虚感と梨花

の空虚感とは地続きにある。

梨花は私だ。もうひとりの私だ。そう感じずにはいられない。

そうして梨花は、ようやく、自分の身に起きたすべてのことが、進学や結婚は言うに及ばず、その日何色の服を着たとか、何時の電車に乗ったとか、そうしたささいなできごとのひとつひとつまでもが、自分を作り上げたのだと理解する。私は私のなかの一部なのではなく、何も知らない子どもの頃から、信じられない不正を平然とくりかえしていたときまで、善も悪も矛盾も理不尽もすべてひっくりかえして私という全体なのだと、梨花は理解する。そして、何もかも放り出して逃げ出し、今また、さらに遠くへ逃げようとしている、逃げおさせることができる信じている私もまた、私自身なのだ。

アイデンティティは、つねに作られ続けている。そして、バトラが明らかにしたように、アイデンティティとは同一性ではなく、たえず言語によって構築され続ける過程である。言語の社会的性質からアイデンティティのカテゴリーは過去との連続性をもつが、言語を使用するエイジェンシー(行為者)によって変更可能でもある。また、さまざまな諸カテゴリーは一枚岩ではない。また、『今のわたし』とは、記録され続ける録画の瞬間を切り取ったスナップショットのようなものにすぎない。(千田有紀、二〇〇五・八五)。「あのときのわたし」も「きのうのわたし」も「今のわたし」も「記録され続けるスナップショット」にすぎないのだ。アイデンティティとは、他者との関係のなかでたちあらわれてくるものであり、流動的で可変的なものである。そのことに気づくことが「へわたし」からの自由であり、「ここ」からの解放となりうる。

私をここから連れ出してください。

「ここ」からの一步は、「この先」へとつながってゆく。それはへわたし」からの自由であり、へわたし」への自由であり、そして、へわたし」を超えてゆくことへの希望である。

〔付記〕

本稿における引用は、角田光代『紙の月』（二〇一三）角川春樹事務所を底本としている。

〈参考文献〉

バトラー・ジュディス（一九九〇―一九九九）竹村和子訳『ジェンダー

トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社。

エリクソン・エリック（一九五九―一九七三）小此木啓吾訳『自我同

一性』誠信書房。

衿野未矢（二〇〇三a）『ひとりになれない女たち 買い物依存、電

話・恋愛にのめりこむ心理』文春文庫。

————（二〇〇三b）『依存症の女たち』文春文庫。

江藤淳（一九六七）『成熟と喪失―「母」の崩壊』河出書房新社。

フリーダン・ベティ（一九六二―一九六五）三浦富美子訳『増補 新

しい女性の創造』大和書房。

石川准（一九九二）『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』

新評論。

駒尺喜美（一九七八）『エロスへの渴望』『魔女の論理』『新編 日本

のフェミニズム十一 フェミニズム文学批評』岩波書店所収、三

三―四四頁。

三浦展（二〇〇五）『消費の物語の喪失と、さまざま『自分らしさ』』

『脱アイデンティティ』勁草書房一〇三―一三六頁。

角田光代『紙の月』を読む

斎藤環（二〇〇五）『乖離の時代にアイデンティティを擁護するた

めに』『脱アイデンティティ』勁草書房、一三七―一六六頁。

————（二〇〇八）『関係する女 所有する男』講談社現代新書。

千田有紀（二〇〇五）『アイデンティティとポジショナリティ』『脱ア

イデンティティ』勁草書房、二六七―二八九頁。

上野千鶴子（二〇〇五）『脱アイデンティティの理論』『脱アイデンティ

ティ』勁草書房、一―四二頁。

山田昌弘（二〇〇五）『迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体』

有斐閣。

ウェッソン・キャロリン（一九九〇―一九九二）斎藤学訳『買い物し

すぎる女たち』講談社。

（注）

（1）『紙の月』は学芸通信社の配信により、静岡新聞（二〇〇七年

九月～〇八年四月）、函館新聞、千葉日報、山陽新聞、東奥日報、

大分合同新聞、北國新聞、上越タイムス、河北新報、山形新聞、

留萌新聞、宇部日報などに順次掲載された。同作品は第二五回柴

田錬三郎賞を受賞。NHKでテレビドラマ化（二〇一四年一月七

日～二月四日放送）され、主人公・梨花は原田知世が演じた。ま

た、宮沢りえ主演で映画公開予定（二〇一五年）。

（2）斎藤環（二〇〇九）は、欲望の二大原理について男性が「所有」、

女性が「関係」という仮説を提出している。しかし、それはジェ

ンダー二元論におちいることなく、圧倒的に所有者が支配するこ

の「世界」のなかでいかにして「関係者」の存在を認識していく

かというジェンダーセンシティブであろうとする態度から導かれ

る問いかけであることに注意されたい。

（3）作者・角田光代は一九六八年生まれ。均等法世代といわれ、ま

さに分断された現在の四十代女性の「気分」を同時代的に共有し

ているといえる。

(4) 三浦展(二〇〇五)は「自分らしさ」について、一九六〇年代から七〇年代の若者にとっては既存の体制からの個人の解放であり、八〇年代においては消費を通じて自己表現であったが、〇年代以降になると、どんな個性も自分らしさも物語も商品化され、カタログ化されて、シリアルナンバーをふられて大量に陳列される高度に発達した現在の消費社会の中で、物を消費することで自分のアイデンティティを語れなくなりつつあると述べている。

(5) 三浦(二〇〇五)は自分探しの不安消費行動な心理状態は、第一に「消費中毒」、第二にブランド志向である「永遠志向」、第三に自己啓発や稽古事といった内面的自己改造を行う学習志向や外面的な自己改造である肉体改造志向などの「自己改造志向」があるとした。

(6) 梨花の消費行動は「買い物依存症」の様相を呈している。「買い物依存症」は嗜癖というより依存症という病理現象としてとらえられ、社会問題となった。「買い物依存症」は圧倒的に女性に見られる現象で、臨床的には「関係アディクション」を基盤とする「プロセスアディクション」の一例である。「買い物依存症」の妻と「仕事依存症」の夫はセットである。ちなみに「関係アディクション」には「恋愛依存症」などがあるとされる。詳しくはウェットソン(一九九〇)や衿野未矢(二〇〇三a)(二〇〇三b)を参照されたい。ちなみに『紙の月』では、梨花の友人の亜紀が「買い物依存症」として描かれており、買い物依存症が原因で離婚した亜紀は、別れた夫のもとで育てられる娘を「愛の対象」としている。

(7) 斎藤環(二〇〇五)は現代を「乖離の時代」と呼ぶ。乖離とは、「人間の心における時間的・空間的な連続性が損なわれること」であり、斎藤自身は乖離現象を病的なものと正常な防衛メカニズ

ムの範疇で理解するかという本質的な区分を認めていない。斎藤は、精神医学的な文脈におくと八十年代は「境界例の時代」九十年代は「多重人格の時代」で語ることができ、それらはまさに「アイデンティティの障害」として理解されていたと説明した。

だが、現在の私たちは「アイデンティティ」が所与に存在するのではなく、他者との関わりのなかではぐくまれてゆくことをすでに知っている。「アイデンティティの障害」とは「単一で安定したアイデンティティの獲得」があらかじめ規定されていた。現代の乖離ブームの流れは「分裂」から「乖離」へという形で抽象化されるのであり、それらの変化は臨床的な事例の変遷というよりは、時代の精神のモードチェンジであると述べている。

(8) テレビドラマ『紙の月』の脚本は篠崎絵里子による。以下は各回のサブタイトルである。第一回「名前のない金」第二回「満たされた渇き」第三回「清らかな罪」第四回「楽園の終わり」第五回「誰のための愛」、梨花は「聖なる墮天使」として表現されている。テレビドラマ版では、正文や光太との関係も「関係性」を深め、梨花が「へわたし」を統合させてゆく物語として展開された。ドラマ最後の台詞は「My name is Rika Umezawa.」

(9) アイデンティティ理論の革新は、アイデンティティ強迫や統合仮説と対抗して生みだされたのであり、現在ではアイデンティティが単一でステティックなものであるとは考えられていない。それは関係のなかでそのつど再定義される多元的で流動的なものである。

(10) 核家族という制度の中で、家庭のなかの夫不在がもたらしたものととして母子癒着があげられる。夫婦間で「関係性」が構築されなかった妻の欲望は、子どもを「愛の対象」とすることで一応の解決をみた。しかし、母親の過干渉あるいは愛情過多を原因とした家族問題が頻出しているのは周知の事実である。また婚外恋愛

や離婚も増加する一方で、夫の定年後の問題として「熟年離婚」
「夫在宅ストレス症候群」があげられている。

角田光代『紙の月』を読む